

【青丹よし】あをによし(その2)

天平元年(729)三月下旬から四月上旬 小野老昇叙祝いの宴 大宰府旅人邸にて。

出席者

- ・大伴旅人[オオトモノタビト]大宰帥(大宰府長官) 正三位
- ・山上憶良[ヤマノウエノオクラ]筑前国守 従五位下
- ・小野老[オノノ オイ]大宰府官人 従五位上
- ・沙弥満誓[サミ マンセイ]=笠朝臣麻呂 筑紫観世音寺別当
- ・大伴四綱[オオトモノヨツナ]防人司佑(防人司次官) 正六位

(官位役職は当時。官位の一部は推測)

『万葉集』巻三 328～351 に基づくフィクション。

老 ・皆様、お蔭様で無事都より戻ってまいりました。本日は私の為にこのような盛大な席を設けて戴きまして真にありがとうございます。

旅人・小野君、堅苦しい挨拶はいいから飲もう飲もう。今日は無礼講だ。

憶良(老に近寄り小声で)・旅人様は酒癖悪いから気をつけて下さいよ。

特に長屋王様自害の話はご遠慮ください。明るい話題で盛り上げて下さいね。

旅人・小野君、何をひそひそやっているんだ。都の様子でも聞かせてくれよ。

老 ・はい旅人様。青丹よし奈良の都は咲く花が香るように今が盛りであります。

四綱・流石に帝のお力はすごいものだ。防人を束ねる私の任務も大切だが、早く都に帰りたいものですな。

旅人・君たちはいいよなあ。藤原氏に嫌われた俺はこの先どうなることやら。政敵がのさばる今の平城京より昔の藤原京のほうが懐かしく想えるよ。

満誓・旅人様、その様なこと仰らないで下さい。隼人の乱を鎮圧した旅人様のお働きは都でも大層評判ですよ。それに筑紫も住めば都ですよ。

この辺りの綿は白く柔らかく暖かそうで、まるで都のおなごのようですよ。

旅人・つまらん慰めを言うものだな。何がおなごのような綿だ。さては満誓、僧侶の身でありながら綿のようなおなごを見つけたな。

憶良(旅人が荒れ気味なので)・さて、私めはそろそろお暇しましょう。家では子が泣いているでしょう。妻も私の帰りを待っているでしょう。

(憶良、そそくさと帰宅)

満誓 ・憶良殿は七十過ぎになられるのに幼いお子がいらっしゃるのですか。

四綱・憶良殿は子を金銀玉にも勝る宝と言っておられる。子作りも子育ても教育も国の根幹とお考えのようです。そうそう、最近私邸に赤ちゃんポストを設置したそうですよ。さすが筑前国守、地方自治体の長ですな。

旅人・何が妻が待っているだ。俺はこの地で果てる覚悟で妻も連れてきたが昨年

逝かれてしまったよ。(旅人の妻＝大伴郎女 728 年大宰府にて没。)

(一同言葉をなくす。小野老は旅人自慢の息子の話題に変えようと努める)

老 ・先ほどから相伴席にて我々の歌を筆記しておられる若者はご子息家持殿  
ではありませんか。しばらく見ぬうちに大きくなられて。

(家持、筆を置き真の礼)

旅人 ・早いもので今年 12 歳になる。家持は宮中の歌はもとより防人たちの歌まで  
も書き留めるメモ魔でな。漢詩はまだまだ俺に及ばぬが和歌の才はなかな  
かのものだぞ。

満誓 ・おやおや、旅人様の子煩悩ぶりは憶良殿に引けを取りませんな。

(以下、旅人の酒を讃える十三首より)

旅人(酩酊して) ・憶良と同じにされては困るな。あんな酒も飲まないで帰るやつ  
なんか猿みたいなものだ。どうも憶良は理性派ぶって気に入らん。  
賢そうに物言うやつより涙酒でも飲むやつの方がよっぽど人間らしいと  
いうものだ。かの竹林七賢も酒好きだったのだぞ。  
憶良は子が宝というが、俺には酒が宝物。いっそ人間やめて酒壺になりたい  
いよ。

古くは祭りなどハレの場でしか飲まなかった酒が、この時代から私的な場でも飲まれるようになり  
ました。酒を飲みながら詩歌を作る宴、これも唐文化の影響といえるのかもかもしれません。酔っ  
払いの始まりは奈良時代ということなのでしょう。

今回は「青丹よし」から脱線し申し訳ございません。酔っ払いがご迷惑をおかけしました。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~